

# あります

in CyberLand 2

第七のプロトコル

PART-2

第七のプロトコル

Version 1.0

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiak J. Konaka

1996/09/20

## 登場人物

水無月 ありす(14)

鳳 麗奈(14)

八神 樹莉(14)

## デンジエルズ

エリーズ・ボードリヤール(17)

マキシム・エリクソン(13)

フレダ・ミロノフ(15)

イリアッド・ムジャリ

麗奈ママ

## 情報省

竜崎 恭子

ジェニー・キーツ

ミスカトニツク学園中等部

ルシア「（オフ）今朝の発表によると、サイバーランドにアクセスする人の約80%がコミュニケーションファイのソフトを使っているそうです。アメリカの独禁法の裁判が既に起こされていますが、判決が出るまでには完全なる支配態勢になっているでしょうし、アメリカ政府の情報省も既にコミュニケーションファイ・プロトコルの導入を決めています」

同ノ教室

デジタル・ティーチャーのルシアが情報基礎の授業をしている。

ルシア「——コミュニケーションファイの新しいプロトコル、すなわち情報をやりとりする為の取決めは、これまでの全てのプロトコルを凌ぐ機能を持っているそうです。それでは今日はここまで」

各机上の仮想モニタに浮かんでいたルシアの姿が消える。

帰り支度を始める生徒たち。

と、ありすのモニタにだけ、またルシアが現れる。

ありす「ルシア……?」

ルシア「水無月さん。情報基礎の授業、身が入っていない様ですね。この調子では、期末考査の結果に良くない影響が出ますよ」

ありす「（がっかり）—— はい。ごめんなさい」

ルシア、微笑んで消える。

麗奈と樹莉が、ありすの机前に来る。

樹莉「さ、帰る帰る」

麗奈「なーにがコミュニケーションファイのプロトコルだったの。あー気分悪い」

ありす「結局、数が正義、なのかな……」

麗奈「今日、ウチ来ない? サイバーランド行く気はしないけどさ、たまには来てよ」

樹 莉「ケーキある？」

麗 奈「ウチのママが切らすと思う？」

樹 莉「わーいわーいケーキだケーキだー」

ありす「（苦笑）小学生じゃないんだからもう」

鳳家

玄関で出迎える麗奈ママ。

麗奈ママ「いらっしやーい。最近来ないんだもの、つまんなかったわ」

樹 莉「ケーキ、じゃなかった……。お邪魔します」

ありす「こんにちは」

東京湾岸部

ぼっこりと開いた縦孔。情報省。

情報省監察センター

巨大スクリーンに、制服姿の初老の男が映っている。

情報大臣「この情報省監察センターのシステムも、コミュニファイ

イ・プロトコルに準拠する事が決まった」

恭 子「情報大臣！ それはちよつと不用意ではありませんか。

コミュニファイのプロトコルはソース・コードが公開されていませんし——」

情報大臣「君の意見は求めていない。明らかにこれまでのものより有利で迅速に処理が出来るものがあるのに、使わないというのは国民の不利益となるのだよ」

恭 子「——（唇を噛む）」

情報大臣「では、そう処理をしてくれたまえ」

ブン。モニタから消える。

ジエニー「竜崎監察官？」

恭 子「——私は、危険な匂いを感じている、コミュニファイは何を考えているのか……」

同ノダイニングルーム

お茶のセットを囲んでテーブルにしている三人。  
麗奈ママ、カード・リモコンでポットから紅茶を自分で注がせる。

ありす「あ、そのリモコンって……」

リモコンにはコミュニファイのマーク。

麗奈ママ「うん、新しく買ったの。便利よ。ウチ中の家電製品が全部リンクして、自由に動かせるんだもの」

ありす「——コミュニファイ・プロトコル……」

麗奈「あたしその会社嫌いなんだけど」

麗奈ママ「だって麗奈ちゃん、あなたの使ってるダイエット・マシンだってコミュニファイのコントローラに換えたじゃない」

樹莉「（ニタアリノ地獄の底から響く様な声）ダイエット？」

麗奈「わっ、そんな事まで言わなくなっただっていいじゃないよ」

「たくもー（ぶりぶり）」

樹莉「へっへっへー。なーんだ、人のことばっか言ってる、自分だってやってんじやない」

麗奈「あっ、あたしはね、ちよつと夏に甘い物食べ過ぎちゃって——」

すつと立ち上がるありす。

麗奈「ありす？」

ありす「ちよつと御免」

出ていくありす。

顔を見合わせる麗奈と樹莉。

樹莉「——おトイレかな？」

麗奈「——かもね……」

マシン・ルーム

降りてきたありす、すつと制服を脱ぎ始める。

ありす「バディ無しで潜っちゃいけない、って決めてるけど……」

タンクに液体が満ち始める。

ドライ・スーツ姿のありす、横たわる。

ありす「（決意の顔）—— あたし、どうしても気になる。ダイ  
ヴ・イン」

目を閉じるありす。

タンク側壁から無数のチューブが伸びてありすのド  
ライ・スーツに結線していく。

サイバーランド／縦パス

ゴオオオオオオオ

激しい水流に逆らって、急速に潜行していくありす。

レヴェル1／WWW

ありす「—— 真っ青！」

行き来するネット・サーファー、クルーザーはおろ  
か、構造物まで青く塗られ、一色になっている。

ありす「こんなになっちゃうなんて……」

ありす、NAVIを操作。

ありす「アドレス・セット。コミュニファイ・サーバー」

キーン！ 光に包まれてありす、瞬間移動。

コミュニファイ・サーバー

実体化するありす。

周囲を炎の壁が取り巻いている。

ありす「ファイヤー・ウォール！ ここまで強固なセキュリティ  
は初めて見る……」

ありす、NAVIを城塞に向ける。

ありす「アクセス、デンジエルス」

ブン！ ありすの眼前に鏡が現れる。

ありす「コミュニファイのCEO、ムジャリさんのデータを知り

たいの。どんな人なのか、何をサイバースランドでしよう  
としているのか……」

鏡 「あなたはだあれ？ アクセス・コード無しにあたしから  
データを引き出すなんて、虫が良すぎると思わない？」  
ありす 「あたしはありす。あなたを困らせるつもりはないの。お  
願い、教えて」

鏡 「ふうん。あたしと会話ができるってくらいだから、あな  
たはかなりの腕があるみたいだけど、でも無理ね。ウチ  
のCEOのデータはとれない」

ありす 「どうしてっ？」

鏡 「アハハハハ。だってあたし自身も知らないんだもの」  
ありす 「あなたはコミュニケーションの情報検索エンジンなんでしょ  
？ そのあなたが自分の創造者を、知らない？」

鏡 「そうよ。文句ある？」

ありす 「文句はないけど、でも、なあんだ。あなたはただ口がう  
まいだけ、見てくれだけのエンジンね」

鏡 「何よそれ！」

ありす 「べつにー。ただ本当の事を言っただけ」

鏡 「失礼ね！ あたしが知らない事はそれだけよ！ あとは  
どんな事だって知ってるわ！」

ありす 「じゃあ、あたしが闘ったマキシンって子のデータまであ  
たしを連れていける？ 無理よね？」

鏡 「あたしに無理なんてないわよ！ 来なさい！」

鏡が輝き始める。

ありす 「あ……」

ありすの姿、鏡の中へ消える——。

ありす 「きゃあああああ！」

鳳家ノダイニングキッチン

麗奈 「今、ありすの声、しなかった？」

樹莉 「え？ ううん……。でも、遅いね、おトイレ」

麗奈 「——！ まさか……」

席を立つ麗奈。

樹 莉「あっ、待ってよおお」

光の奔流

その中を漂うありす。

ありす「（モノ）——ここはどこ？ デンジェルスメンバーの情報を知りたいだけなのに……」

と——、ありすの行く先に暗い孔が見える。

ありす「——あれは……」

ありす、その暗い孔に近づいていく。

そこは——ロスの路地裏。

LA/ダウンタウン/夜

幻像のありすが立つ。

暗い路地裏。遠くをパトカーの走る音。

ありす「——ここは、どこ？」

ありす、歩き始める。

低所得層が住むアパートが立ち並んでいる。

シヨッピング・カートを押すホームレスの老女。

ありす「あの、すみません、ここ、どこなん——」

老女、ありすに気づかず、ありすの身体を突き抜けて歩き去っていく。

ありす「——あたしは——ここにはいないんだ……」

ふと、誰かがこちらを見ている気配に気づき、振り向くありす。

ありす「！ マキシン！」

そう。窓から外をぼんやりと見つめていたのは、貧しい服を着たマキシン。

しかしありすには気づいていないらしく、部屋の奥へ戻っていく。

ありす、窓に近づいて中を覗く。

部屋の奥のキッチンでは、酒に酔った父親と、生活にやつれた母親が言い合いをしている。



母 「そんなお金、どこにあるっていうんだよ！」

父 「来月の事なんて後でいいだろうがよ。それより今の信用の方が大事だったのが判んねえのか！ このガキ（マキシン）は、機械ばかりいじって役に立たねえし」

母 「あんた！ マキシンに何させようって思ってたんのよ！」  
父 「何も考えてねえよ」

二人の言い合いが、まるで聞こえていないかの様にマキシンは、キッチンの脇のNAVI端末に向かって何かのプログラムのデバッグをしている。

あります「——マキシン……」  
と、ありますの周囲が光に包まれる。

マキシンの家ノ内部

あります、いつの間にかマキシンの脇に立っていた。  
マキシン、やはり気づいていないのか、キーボードを黙々と叩いている。

あります「——そこ、代入する式が違う……」  
マキシン「えっ？」

マキシン、ありますを一瞬見上げ、仮想モニタを見る。  
マキシン「あ、ほんとだ……」

驚いていたあります、しかし、事態を把握。  
あります「——あなたは未だデンジェルスになっていないのね？  
「ここはきつと、時間が逆戻りした世界なんだ……」

マキシン「そうなの。ここは、あなたがいる時代よりも二年も昔  
あります「——そして、二年後に、あたしとあなたは闘う……」  
悲しそうな顔のあります。

しかし、マキシンは怪訝そうな顔でありますを見上げる。

マキシン「そんなこと、ないよ」  
あります「え……？」

マキシン「あたしとあなたが闘うなんて、ありえない」  
あります「——ど、どうして？」

マキシン「——（寂しそうに目を伏せ）だって、あたし、あと

二日で死んでしまっただもの……」

ありす「（衝撃）——え……（掠れた声）」

マキシ「あなたと今会話しているこのあたしは、マキシ・エリクソンのメモリ・データ。このデータは、あと二日分までしか残されていない……」

ありす「——そんな……。じゃあ、デンジエルのマキシんっ

て……、誰なの……（慄然）」

マキシ「——（微笑）さあ？」

ありす、光に包まれる。

ありす「あっ！ 待って二」

マキシ「バモールのせいよ。忘れないで」

——ありすの姿、消える。

マシン・ルーム

ザバツ！ 身を起こすありす。

ありす「ふう……」

濡れた顔を手で拭う。

麗奈と樹莉が腕組みして立っていた。

麗奈「ありす。バティ無しでダイヴしちゃいけない、って言う

たのはあんたでしょ」

樹莉「駄目だよー」

ありす「——（微笑）ごめん。もうしないから、許して」

麗奈「ったく……。 （微笑）ありすのその顔で頼まれると、絶  
対断われないんだよな。得な性格してるよね」

ありす「ほんと、御免……」

ありす、ふ、と思案気な顔になる。

ありす「デンジエルス……。どこから来たの……？」

渋谷の街

ハッと見上げるありす。

飛行船が低空で飛んでいる。まるでそこはサイバーランドか。しかしそれは現実の広告飛行船であり、

「コミュニケーションファイのロゴを宣伝している。」

麗奈宅を辞したありすと樹莉が歩いている。

樹莉「びっくりしたー。まるでサイバーランドにいるのかと思  
っちゃったー」

ありす「——ほんと……。でも、似たようなものなのかも」

樹莉「えっ？」

ありす「だって、サイバーランドのプロトコルを支配するって事は、リアル・ワールドを支配する事と、今の時代は同じ  
なんだから」

樹莉「なんか、怖い……」

心なしか、街の灯もみな青味を帯びている様に見える。コミュニケーションファイのロゴがそここのビル、走る  
車、歩く人の鞆やTシャツに見てとれる。

109前

前を歩いてきた二人、人だかりがしているのに気づ  
き、近づいていく。

樹莉「ね、何かやってるよ。見てみようよー」

ありす「うん」

人の間を抜けて、イベントをしているステージ前に  
来るありすと樹莉。

樹莉「あっ！」

ありす「あれは……」

ステージの上に立っているのは、デンジェルス。そ  
のホログラフ映像が歌っている。

M C「只今お送りしているのは、全世界同時321箇所で開催  
している、デンジェルスのライブです！ デジタル・エ  
ンジェルの歌声をお聞き下さい！」

盛り上がる若者達。

固い顔で見上げていたありす、サツと身を屈め、ス  
テージ裏へ向かう。

樹莉「あっ、ありす、どこいくの？」

中継車内

ガチャ。ドアを開けて入ってくるありす。

樹莉も入ってくる。

樹莉「あれ？ 誰もいない」

ありす「自動化されてるみたい」

ありす、コンソールに向かう。

樹莉「ちょっと、ありす、ヤバイよそんな勝手に」

ありす、じつと操作盤を見つめていたが、おもむろにパネルを操作。

ありす「やっぱりコミュニファイ・システムで動いてる。インターフェイスが共通ってのだけは、嬉しいかもね」

樹莉「あーあー、勝手に！。あたし知らないっ」と

ピッ。S「ようこそコミュニファイ・システムへ」

ありす「マキシン以外のデンジェルスのデータを教えて」

ピッ。S「アクセスコードをどうぞ」

ありす「——バモート」

ブン。凄まじい勢いでテキストがスクロール。

樹莉「バモールって何？」

ありす「マキシンの教えてくれたの」

樹莉「えっ？」

ありす「エリーズ・ボードリヤール、フランス人……。二年前に交通事故で死亡」

樹莉「——（脅え）何を、言ってるの？」

ありす「フレダ・ミロノフ、三年前に火事で死亡……。それだけじゃない……。コミュニファイは、死んだ人間のデータを買っているんだ！」

樹莉「——何でそんな事……。誰が？」

ありす「CEOイリアッド・ムジャリ……。でも、そんな人、本当は存在していないのかも……」

ガチャツ。いきなりドアが開き、エンジニアの若い男が入ってくる。

エンジニア「あれ？ 君たち、ここで何してんの？」

ありす「あっ、あの、その……」

エンジニア「(険しい顔)何か悪戯してたのか? 警察に……」  
樹莉「(ニマツ)やだなー。あたしたち、コミュニケーションファイの人に呼ばれてここ来たのにー。これからここであたしたち水着に着替えるんだけど、もし脱いでる途中だったらどーすんですかー? はつきり言っただけ覗きじゃない」  
エンジニア「えっ? あ……(汗)」  
樹莉「(にらみ)ちゃんとノックくらいして欲しいんですけどー」  
エンジニア「ご、ごめん。そっか。じゃ……」  
そそくさと出ていくエンジニア。  
顔を見合せるありすと樹莉。  
ありす「ありがと、樹莉」  
樹莉「へへ。けど、どうしょ……」  
ありす「脱出!」  
運転席側の窓を開け、出ていく二人。

情報省監察センター/廊下

歩いている恭子。

と、背後からジェニーが両手に紙カップのコーヒーを持って来て

ジェニー「竜崎監察官」

恭子「ああ、ジェニー。ありがと(コーヒーを受け取る)」

ジェニー「最近ヒマですね。サイバーナキストたちが一掃されてから事件も起きないし。案外コミュニケーションファイって、サイバーランドの救世主なのかも」

恭子「だどどんなに嬉しいか」

ジェニー「そうじゃないんですか? あんなに無秩序だったサイバーランドを安全で平和にしてくれたんだもの、あたしは感謝してるな」

と——恭子の厳しい目を見てギョツとなる。

ジェニー「りゅ、竜崎さん……?」

恭子「——来なさい。自分の目で見るといいわ」

ツカツカと進んでいく恭子。

ジェニー「どこ行くんですか？」

ありすのマンション／外觀

ありすの部屋

ぼんやりと卓上NAVIの前にいるありす。

仮想モニタには、麗奈たちと楽しんだ海のデジタル

・フォトがスライド・プレイされている。

ありす「綺麗だったな、あの海……。あの青さは、本物の青……」

と、あの海底ケーブルの画像が浮かぶ。

じっとそれを見つめていたありす——

ありす「ズーム」

ピ。ズームする画像。その側壁には奇妙な紋様が刻まれている。

ありす「言葉だしたら……。スキャン・トレース」

ピピピ。紋様がグリッドにトレースされていく。

新しい窓が開き、その紋様が移されていく。

ありす、キーボードを叩き始める。

ありす「機械語かもしれない……。逆コンパイルしてみよ」

また新しい窓が開き、意味不明なアルファベットが並んでいく。

ありす「——何だろう……。クリプトグラフィでもないみた

い……。アカシック・レコード検索」

ピ。S「検索中」

ありす「——こんな言語、これまで見たこともない……」

検索終了のチャイムが鳴る。

S「検索結果：合致する言語はありません」

がっかりするありす。

ありす「似た言語体系を持つものは？」

S「バモール語」

ありす「——何？それ」

S「中世紀に悪魔が語ったと言われる言葉」

暗然となるありす。

あります「それって、どういうもの？ どこで使われたの？」

暫し沈黙するNAVI。

あります「——（嫌な予感がしている）——まさか……」

S「悪魔との契約を記した文書」

あります「その文書とは？」

S「第七の盟約」

あります「第七のプロトコル——（愕然）」

ブン！ NAVIのモニタ以外が暗くなり、NAV  
Iの画面の奥に邪悪な影が浮かぶ。

あります「何をしようとしているの？」 第七のプロトコルって、何を目的とするものなの？」

闇よりの声「全人類の進化を止め、全ての価値観、全ての倫理、全ての知識を等しくするもの」

あります「（悲痛）そんな事駄目……」

情報省ダイヴ・ルーム

フライト・シミュレータの如き巨大な装置。

そこに全身をワイヤー・スーツで吊られているジエ  
ニーと恭子。ありますたちのダイヴ・システムよりも  
何倍も大掛かり。

ジエニー「監察官のダイヴ・インには申請が必要なんですよ？」

恭子「その申請も段々降りなくなってるのよ。コミユニファイ  
の機能がそれを代換するとかでね。いくわよ」

恭子、わずかに自由な指先でパネルを操作。

ウイイイイイン。

低い唸りが部屋を包む。

恭子「メタファライザー作動」

目を閉じる恭子。

サイバーランド／WWW

背にラムジェット風ブースタを着けて飛ぶ恭子とジ  
エニー。

恭子「見なさい。青に染まった世界。こんものが、サイバーストドだなんて！」

ジェニー「——こんなにちやっってるなんて……」

レヴェル1、構造物が無くなり、青い円盤状に変容している。

恭子「コミュニファイのCEOと直接話をするわ」

ジェニー「そんな！日本の監察官クラスが会える相手じゃないでしょう？」

恭子「監察官として会うんじゃない。(ニヤ)一人のネットワークとして会いたい。ここは全てが平等なんじゃない？コミュニファイはそう言っていない？」

ジェニー「——コミュニファイのサーバーのアドレスを転送します」

NAVI同士を突き出し合う二人。

恭子「アクセス、コミュニファイ・サーバー」

ブン！二人の姿、光に包まれて消える。

コミュニファイ・サーバー

炎の壁に囲まれた城塞。

ブン！実体化する恭子とジェニー。

ジェニー「ファイヤー・ウォール！」

恭子「イリアッド・ムジャリ！あたしはあなたと話がしたいの！ここを通して！」

と——ファイヤーウォールが開いた。

ジェニー「開いた……」

しかし——

恭子「デンジェルズ……」

三人の少女が、その内側に居た。

エリーズ「役人ごときがこんなところまで入れると思うの？」

恭子「ムジャリと話をしたいの。あなたたちに用はないフレダ、エリーズ、どうする？」

エリーズ「退屈しのぎになるね。あたしにやらせて」

エリーズ、前へ。



ジェニー「りゅ、竜崎さん」

恭子「この子達、いったい……」

エリーズ、ドラゴンの姿へ変容し——炎を吐きかけてくる！

ジェニー「キャアアアア！」

恭子、ハンドガンで応戦するも——

恭子「くっ、こんな武装じゃ歯がたたない！」

炎に焼かれる二人。

恭子「うあああああっ」

と——！

眩しい輝きが一閃。

恭子「！ あれは！」

虚空から舞い降りてくる、ありす、麗奈、樹莉。

麗奈「やっぱりバケモノだったんだよあいつ！」

ありす「今度は負けない！」

樹莉が、恭子とジェニーを救い出す。

恭子「サイバーランド・プリンセスね……。初めて見たわ」

樹莉「早くエキジツトして！」

ジェニー「ありがとう……」

恭子「気をつけて。コミュニティを止めて！」

浮上していく恭子とジェニー。

〔選択〕

麗奈「あたしに行かせて」

麗奈、パワード・スーツを装着。

麗奈対エリーズ

樹莉対フレダ（腰砕け戦法）

ありす対マキシ

ありす「——マキシニ あなたはこんな闘いを続ける為に、

このサイバーランドに戻ってきたの。そんな事がある  
たの望み」

マキシ「あたしは——あたしは死にたくなんてなかった」

激突する二人。

マキシ、先鋭的デザインのメカへ変身。

ありす「マキシイイイン」

ジャキ！ ありすのソード、七支刀へ変形。

ガアアアアンニ ありすの七支刀がマキシンを真っ二つに割る。

ドオオオオンニ

静寂——。

ファイヤーウォールが消滅した。

麗 奈「どうする？」

ありす「行くしか、ない！」

三人、城塞の中へ。

城塞内

そこはプラネタリウムの様なドームの中。虚空に様々な図形が浮かんでいる。

入ってくるありすたち。

ありす「あっ！」

ホールの中央に、一人の少年が立っていた。美しくも冷たい顔。

ありす「あなたが、イリアッド・ムジャリ？」

樹 莉「いたんだ、やつぱり……」

ムジャリ「デンジェルスを倒したんだ。さすがだね。君たちのダイヴ・システムは不可解だ。人間の書いたプログラムとは思えない」

ありす「——あたしたちの事より、コミュニケーション・プロトコルの事を聞きたいの。どうしてこんな事するの？ どうして死んだ人のデータをもてあそぶの？」

ムジャリ「——この世界にどうして戦争があると思う？」

ありす「えっ？」

ムジャリ「いろんな国の人間が、いろんな考え方を持っている。

それが戦争を引き起こしているのさ」

ありす「そんな！ 戦争は——みんなが努力すれば、無くなるはずよ！」

ムジャリ「（嘲笑）そうかな。それほど人間は賢い生き物かな」  
ありす「あたしは——あたしは信じている！」

ムジャリ「僕だつて信じたかつたさ！ でも、僕の生まれた国にその祈りは通じなかった！ 僕の家にはね、ミサイルが落ちたんだ」

ありす「——（愕然）それで……。お父さんや、お母さんを？」  
ムジャリ「——そして、僕自身の生命を失ったんだ！」

三人、慄然。

ありす「でも——、でも、こんな事じゃ解決にならない！」

ムジャリ「（苦しそう）そう。そうだと僕も判っている。でも、

僕自身でもどうにもならないんだ！ 僕自身の哀しみが

——あいつに……」

と！ 床下から、魔法の様に次々とメカが生えて、ムジャリを取り囲む。

ムジャリ「ぎゃああああああっっっ」

ありす「ムジャリ」

ムジャリ、メカに包まれ——奇怪な黒い機械人形へと変身した。

〔選択〕

ありす達に襲いかかるムジャリ！

ありすが立ち向かう。

七支刀となったソードで再度立ち向かうが——、

ムジャリのパワーは圧倒的。

麗 奈「ありす！」

ありす「ムジャリ！ あなたは誰かに利用されているんですよ  
目を醒まして」

ムジャリ「僕はもう死んだ人間なんだ！ このサイバースペースでしか生きられない」

二人、虚空でもみ合い——床に激突

ありす「きゃああああ」

ドゴーン 床が割れ、暗い奈落へ落ちていく二人。

樹 莉「ありすっ」

ゲイト・オブ・ヘル

そこは——巨大な地底洞窟。



ムジャリ「奴が……、奴が出てくる！」

ムジャリ、僅かに残された力を振り絞り、ありすの元から離れて、門に向かっていく。

ありす「どうするの？」

ムジャリ「僕か止める！ 奴が出てきたら、サイバーランドが、リアル・ワールドが暗黒になってしまう！」

開き始めた門を、全身で阻止しようと身体を張るムジャリ。

ムジャリ「うあああああっっ！」

ありす「ムジャリ！」

一瞬の静寂。

ムジャリ、ふ、とありすに振り向き、寂しそうな笑みを見せる。

ムジャリ「——リアル・ワールドで、生きて君と会いたかったよ……」

ありす「（泣き声）ムジャリ！」

ムジャリの身体を、巨大な手が掴み、暗黒へ引き戻す。

そして——門が開いた。

麗奈「門が！」

樹莉「何が出てくるのおお！」

ありす「——死の世界からの侵略者……」

ぐおおおおおおんん

咆哮が轟く。

門より、そのおぞましい姿を露にし這い出てくる邪神バモール。

樹莉「きゃあああつ二」

樹莉の身体が、醜い手に掴まれる。

麗奈、パワード・スーツ・モードに変身し——、突っ込む！

麗奈「化け物め！ 地獄へ帰れ！」

しかし——バモールの強靱な力で、パワード・スーツが剥がれていく。

麗奈「きゃあああ！」

樹莉の身体、虚空へ放られる。

それを抱き止めたありす——、そっと床に置いてバモールに立ち向かう。

ありす「——もうゲージが……。パワーも……。あたしにはもう闘えない……。しかもあんなに強い相手……」

バモールが襲いかかる。

ありす「（強い顔）でも、行くしか、ない」

俊敏なアクションでバモールの攻撃をかわし——

醜い目をソードで突く！

バモール「ぐおおおおおんんん」

怒りに身を震わせ——バモールはありすに容赦なく拳を奮つ。

ありす「きゃああああつ」

あまりの激痛に身を擦らせるありす。

バモール、ありすのソードを、唾液で溶かした。

ありすのプロテクターも次々と溶けていき、ドライスーツ状へ。

ありす「——もう……。あたし……」

ガキツニ 門へ磔となるありす。身動きが出来ない。バモールが近づいてくる。いやらしい笑みを浮かべ。

ありす「ルシア……。あたしはもう、駄目なの？ もう、先生になっちゃんだよね……。もう、あたしを助けてはくれないんだよね……」

と——、ありすの眼前に、ルシアの幻像が浮かぶ。ありす「（虚ろな目）ルシア……？」

地面で身を寄せ合っていた麗奈と樹莉も驚いて見上げている。

樹莉「あれ……。あたしたちのデジタル・ティーチャー……」

麗奈「いや、違うよ……。まるで——まるで、天使……」

ルシア「あたしはあなたを、もう助けられない。でも、あなたたちは、三人の力を合わせられる。お願い。サイバーランドを護って」

ありす「力を——合わせて……」

ハッと正気に帰るありす。

眼前にまで迫ってくるバモール。

ありす「麗奈ニ 樹莉ニ 力をニ あたしに力をニ」

麗奈と樹莉、目を閉じる。

と——二人の姿、光に包まれ——光球となつてありすに向かつて飛んでいく。

バモールの巨大な口蓋がありすを噛み砕こうとしたその時！

光と一体となつたありすが、爆発的な眩しさに輝く。バモール、その衝撃で後退。

目を凝らすその眼前に浮かんでいるのは——

ハイパーモードとなつたありす。

ありす「邪神バモール。ここはお前の来るところではない。地獄へ帰りなさい」

バモール、怒りに身を震わせ——突進してくる！

ハイパーありす、両腕を広げ——力を蓄え——

拳を突き出すニ そこから放たれたのは、恐らく、神の力。

ぐおおおおおおおおおんんんニ

大爆発！ バモールは消滅した——。

暗黒だつたそこが、やがて青く染まっていく。

そこは——海の底……？

ハイパーありす、徐々に光を失い——、

寄り添い会う三人になつた。

樹莉「あたしたち……」

麗奈「何が起こつたの？」

ありす「（微笑）ありがとう。麗奈、樹莉。さ、エキジットしよ」

麗奈「（微笑）うん」

樹莉「わーい！」

三人、手を繋いで上昇していく——。

レヴェル1俯瞰図

青かった世界が——また色とりどりの混沌とした世界へ戻っていく——。

ミスカトニック学院

登校してくる生徒たち。

ありすと麗奈も校舎に向かっていく。

と、背後から樹莉。

樹莉「まーってよおお！ ありすーっ！」

麗奈「あんた、また寝坊したでしょ」

樹莉「だってだってー、ミーにゃんが目覚し止めちゃったんだもん」

麗奈「どこの猫が目覚しわざわざ止めるよ」

樹莉「ミーにゃん、頭いーもん！」

麗奈「そーい問題じゃない」

ありす「（苦笑）さ、遅刻しちゃう」

教室

ルシアの授業中。

ルシア「—— コミュニファイ社が原因不明のサーバー事故で、賠償問題からネットワーク産業より撤退して以来、サイバーランドのプロトコルは混乱状態が続いています。皆さんも、勉強しなくてはいけない範囲がまた広がっていますからね」

生徒たち、一斉にブーイング。

生徒A「ちえーっ。めんどくさいなー」

と、授業終了のチャイムが鳴った。

ルシア「では、また来週」

各机上の仮想モニタに浮かんでいたルシア、消える。ありす、席を立とうとすると——

ルシアの声「ありす、ありがとう」

ありす「（振り向く）えっ」

何もそこには見えない。

麗奈と樹莉、来る。

樹莉「ねっ、今日、潜らない？」



ありす「サイバーランド？」

麗奈「オツケー。久々に、ぶいぶい言わせますかーっ」

三人、教室を出ていく。

ジジツ。ありすの机の上の仮想モニタが、一瞬女神ルシアの姿を映し出す。

End of the Game